

<b>Title</b>	翻訳語と中国思想：『哲学字彙』を読む
<b>Author</b>	三浦, 國雄
<b>Citation</b>	人文研究. 47 卷 3 号, p.183-226.
<b>Issue Date</b>	1995
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学文学部
<b>Description</b>	

Placed on: Osaka City University Repository

## 翻訳語と中国思想——『哲学字彙』を読む——

三 浦 國 雄

一

小論では、当時の哲学界の大御所、井上哲次郎らが編んだ『哲学字彙』を取り上げ、編者たちが学術用語テクニカル・タームの翻訳移植という課題①に対してどのような姿勢で臨んだかを、中国思想のサイドから考察してみる。

『哲学字彙』は三回版を重ね、そのつど改訂②されている。

まず、初版は明治一四（一八八一）年、東京大学三学部より刊行。本文九九ページ、附録の「清国音符」（中国語発音辞典）二六ページ。井上哲次郎は、「序文」のなかで本書の編纂方針をおおよそ次のように明かしている（原漢文）。この時、井上はまだ二七歳の若さであった。

一、本書は英国人弗列冥フレミング氏の『哲学字典③』に依拠して編まれたが、この字典には近世のタームが少ないので、和

田垣謙三・国府寺新作・有賀長雄らと共に徧く諸書を渉猟して語彙を大量に増やした。

二、先人の訳語のなかで妥当なものは全て採択したが、それら以外の新訳語については、『佩文韻府』(清朝の熟語大用例集)、『淵鑑類函』(清朝の大百科辞典、熟語の用例も含む)、『五車韻瑞』(明朝の熟語用例集)などのほか、博く儒教・仏教の書物を参考にして定めた。全ての語について典拠を示すことはしなかったが、難解な訳語については注記を加えて初心者に便宜をはかった。

三、語の意味は往々にして「学科」(学問ジャンル)によって異なるので、括弧内に当該語の属する学科名を記しておいた。哲学専用用語についてはこの限りではない。

附録の「清国音符」について一言しておきたい。これは、四千字余りの漢字にローマ字で発音を表示し、アルファベット順に配列したものだ。が、何故このようなものが『哲学字彙』についているのだろうか。思うにこれは、音訳された漢字に置き換えられた欧米の固有名詞(特に人名)を解読するためのものではないだろうか。日本語の音ではなく中国語であるわけは、当時中国で翻訳された文献を念頭に置いているからであろう。『哲学字彙』も欧米の人名は仮名ではなく漢字で表記しているが、カントを「韓図」と音訳している例などを見ると、こちらの方は必ずしも「清国音」に準拠しているとは思えない。

第二版は、初版から三年後の明治一七(一八八四)年、東洋館より刊行。文学士井上哲次郎、同有賀長雄増補。本文一三六ページに、初版の「清国音符」のほか一〇〇ページ余の浩瀚な「梵漢対訳仏法語藪」(サンスクリット語漢訳辞典)が新たに附載されている。「序文」は、ドイツ留学中の井上に代わって今度は有賀長雄が書いている。大意は次のごとくである(原漢文)。

一、本書は我々東京大学の同窓の者によって編まれたが、井上哲次郎君が最も尽力した。哲学は日々隆盛に向かい、昔日の比ではない。初版はすでに品切れたので、我々はここに初版の誤りを正し足らざるを補って再版を出すことにした。

二、「梵漢対訳仏法語藪」は、英国の「伝教師」愛啼兒アイテールの『支那仏法要領』<sup>(8)</sup>を書き写したものである。近時、インド哲学を研究する人が増えてきたので、今や入手難のこの本を附録とした。

第三版は、第二版から約三〇年後の明治四五（一九一二年）、丸善より刊行。文学博士井上哲次郎、同元良勇次郎、同中島力造共著<sup>(9)</sup>。表題に「英独英和哲学字彙」とあるように、英語のほかに独・仏語も加えられ、そのままサンスクリット・ギリシャ・ヘブライ語等が挿まれる。第一・第二版は、見出しの欧語はヨコ、訳語はタテ組みであったが、この第三版に至って全てヨコ組みになっている。本文一七八ページ、補遺約二〇ページ。附録には「清国音符」や「梵漢対訳仏法語藪」が消え、代わりに「星座名」と「地史系統通覧」<sup>(11)</sup>がついている。もっとも、これらは一、二葉の翻々たるものであるが。「序文」は、今度は井上哲次郎（このとき五八歳）が英語で寄せ、本書は大量の翻訳文献における訳語の混乱を整理するために編まれ、欧米のテクニカル・タームの Japanese equivalents を最終的に確定するのが目的である——という意味のことを述べている。

## 二

次に本書の内容を具体的に検討してゆくが、まず三版相互の全般的な変化ないし相違から話を始めたい。

第一版と第二版との差異は、第二版と第三版とのそれに比べると何程のこともない。前引第三版の井上序に言う通り、第三版になって見出しは二倍強にも増加し、大見出しに附随する小見出し（派生語）もいっそうきめ細かくなっていて、この三〇年間でわが国の學術がいかに発展したかがよくわかる。たとえば Religion を取り上げてみよう（三版とも見出しの頭文字はイニシャル）。以下引用はそれに倣う。

Religion

I (第一版) 宗教

Universal religion 一統宗

II (第二版) 宗教

Universal religion 宗教

III (第三版) (Lat. religio, Ger. Religion, Fr. religion) 宗教（按、宗鏡録云、融会宗教之旨）

Atheistic religion 無神論的宗教

Comparative religion 比較宗教

Dualistic religion 二元的宗教

Ethnic religion 民族的宗教

Hemitheisitic religion 半有神的宗教

History of religion 宗教史

Monotheistic religion 唯一神教的宗教

- National religion 國民的宗教
- Natural religion (Ger. natürliche Religion, Fr. religion naturelle) 自然宗教
- Pantheistic religion 汎神論的宗教
- Philosophy of religion: see Philosophy
- Polytheistic religion 多神論的宗教
- Positive religion 成立宗教
- Practical religion (Ger. praktisch Religion, Fr. religion pratique) 實際的宗教
- Primitive religion 原始宗教
- Religion of Humanity (Ger. Menschheitsreligion, Fr. religion de l'humanité)(Comte) 人道教
- Revealed religion 天啓教
- Science of religion 宗教学
- Universal religion 一統宗、世界的宗教
- Bergleichende Religion: Same as Comparative religion

また、訳語が目まぐるしく出入りする様子や、今日の訳語に定着するまでの生みの苦しきもよくわかる。三つほど例を挙げてみる。

Sociology <sup>(12)</sup>		Economics		Art	
I	世態学	I	家政、理財学	I	術、技芸、伎倆
II	世態学、社会学	II	家政、理財学	II	術技、芸、伎倆
III	社会学	III	家政、理財学、経済学	III	技術、伎倆、芸術

また、Culture は次のようになってゐる。IIIに至ってようやく「文化」<sup>(14)</sup>が現われるが、同時に「礼文」「礼脩」といった儒教臭の強い古めかしい漢語も新たに補充され、まだ「文化」にピントが合っていない。

Culture

- I 修練
- II 修練
- III 修練、文化、人文、礼文、礼脩、修養

一方、目を Civilization に転じてみよう。

Civilization

- I 開化<sup>(16)</sup>
- II 開化
- III 開化、文明、文化

見られる通り、Ⅲに至ってこちらにも「文化」の語が現われ、両者の境界にまだ曖昧さが残存している。<sup>(18)</sup> 名詞と形容詞の区別については、次のようにすでにⅠの段階から出現している。

Object

Objective

- |                      |             |
|----------------------|-------------|
| I 物、志向、正鵠、客観         | I 客観的       |
| II 物、志向、正鵠、客観、物象     | II 客観的、物界的  |
| III 物、準的、正鵠、目的、客観、対象 | III 客観的、物界的 |

しかし、Ⅰ・Ⅱではまだそれほど頻用されていなかったのが、Ⅲになると本格化する。たとえば、

Mortal

- |                      |
|----------------------|
| I 合死 <sup>(19)</sup> |
| II 合死                |
| III 合死的              |

断っておくが、このような「的」は現代日本語のそれではなく中国語としての用法である。Objective ≡ 客観的などの例ではその違いがわかりにくいので、もう一例引いてみる。

Überzeugung von dem Dasein Gottes

III 神的存在之確信



右の「的」は、現代の我々の一般的な（ここでもつい思わず「的」を使ってしまったが）用法からすると「神」のようなもの存在……という意味であるが、原義はそうではなく、端的に（ここでもまた「的」だ）「神」の存在……でなければならぬ。

「主義」に対する「性」という「重宝なこと」も、I・IIに現われぬことはないが、IIIに至って頻繁に使われる。たとえば次のような例。

Utilitarianism

Relativity

- |               |         |
|---------------|---------|
| I 功利学         | I 相对    |
| II 功利学        | II 相对   |
| III 功利主義、実利主義 | III 相对性 |

いま右に挙げてきた諸例からも察せられるように、一つのタームに対する訳語の数もIIIに至って急増している。次の例はやや極端にしても、類似の事例はIIIではさほど珍しくはない。

Investigation

- |  |
|--|
| I 究察、稽查、尋繹、鈎深  |
| II 究察、稽查、尋繹、鈎深、討尋、尋究   |
| III 究察、稽查、尋繹、尋思、推明、探明、探頤、考覈、深究、討尋、尋究、窮討、窮探、推究、推求、尋念、穿鑿、詮索、檢考、究極、索隱、窮幽、洞徹、覃思、沈研、討尋、研尋、攻究、精麗、研究、審覈、窮綜、 |

## 研覈、檢覈

このような例を見ると、我々は井上がⅢに寄せた序文中の語を想起せざるを得なくなる。先に引いたように、ここで井上はこの字典が編まれたそもそもの動機に触れて、一つのタームに various expressions が当てられるような訳語の混乱を整理收拾するためであると述べていた。それなのに夫子自身がかくも多様な訳語を当てがうようでは、混乱にいつそう拍車をかけることになりはしないか。

こうした疑問を念頭に置きながら、次に我々はⅠ・Ⅱ・Ⅲを全体として眺めて、そこに現われている翻訳語同定の姿勢を検討してゆこう。

まず、今まで掲げた諸例から容易に見て取れるように、『哲学字彙』は「てにをは」さえも使わず和語を排し、徹頭徹尾漢語で押し通している。仮名をいっさい使わないから、固有名詞も音訳した漢字を当てる。従って本書は、一見したところ英漢辞典のような印象を与える。

当時、横文字を和語で受け留めようとする試みも一方でなされていた。かの「哲学」の訳語を創案した西周も和語訳を企てたことがあった。次にその一部を例示しよう。<sup>24</sup>参考までにⅠの訳語を括弧内に引いておいた。

analysis	わかっはこび（分解法）
classification	たぐひよせ（彙類法）
comprehension	ふくみ（会得、貫通、包裹）
deduction	ひきだすかんがえ（演繹法へ論）

definition	なさだめ（定義）
extension	ひろがり（延長、広袤、容性〈物〉、外延〈論〉）
judgment	ことわりことば（断定、裁判〈法〉）
quality	さま（形質、品位）
quantity	はかり（分量）

また、清野勉は真理に当たる語として「本真」を使い、そこに「ホンマ」とルビを振る<sup>(26)</sup>。「ホンマ」は関西方言である。ここまでくると、和語というより日常語の世界である。ある日本の哲学者がドイツに留学した時、子守り女が難解な哲学用語を使うのを見て驚いたという話を聞いたことがあるが、「基本的概念に関する限り、西洋の哲学用語は特殊な専門的術語ではなく、日常言語がそのまま哲学用語として用いられている」と、杉原丈夫氏も述べておられる<sup>(26)</sup>。和語ないし日常語をやりすこし、欧語を漢語でもって受け留めた井上らは、こうした立場とは対極的なところに身を置いていたわけである。

『哲学字彙』の数多くの漢訳語について、一語一語その素姓を洗ったわけではないのであるが、その殆どは中国の古典を典拠に持つ由緒正しい語だと断定しても大きくは誤らないと思う。由緒正しいというより大変ブキッシュな語であって、いくら明治の知識人が漢学・漢語に強かったとはいえ、よほどの漢学の専門家でない限りピンとこない語が少なくない。たとえば次のような例。

## Asceticism

### I (項目なし)

II 嚴肅教、制欲主義、嚴括主義、按、揚子修身篇、其為外也、嚴括則可以禪身。

III 禁欲主義、肅括主義、按……(以下IIに同じ。但し「嚴」↓「肅」)

右の例では、揚雄の『法言』修身篇を典故とする「肅括」に「主義」を結びつけて訳語の一つに加えているのだが、典故に遡らねば意味の取りにくい語をわざわざ挙げねばならない必然性がよくわからない。次の例も同様である。

## Ambiguous

I 曖昧、糊塗、滑疑、按、莊子齊物論、滑疑之耀、聖人之所囿也、口義、滑疑言不分不曉也。

II (Iに同じ、按語も同じ)

III 曖昧、糊塗、汎意的

## Vanity

I 虚誇、浮華、盜夸、按、老子、服分綵、帶利劍、厭飲食、財貨有余、是謂盜夸、非道也哉。

II (Iに同じ、按語も同じ)

III 虚傲、虚榮、虚誇、夸詡、浮華、矜慢、暴慢、誇張、盜夸、按……(以下Iに同じ)

当時、幾人の人が「滑疑」や「盜夸」から、Ambiguous、や、Vanity、に辿り着けたのだろうか。

こうした多様な漢語列挙や晦渋な漢語好みは、井上たちの訳語考案の基本的なスタンスだったとしてよいだろう。というのも、当時、漢語を使用しながらもなるべく平易な表現を旨とした訳語会の動きが一方にあったからである。こうした井上たちの姿勢はどう理解すればよいか。帝大教授のペダントリーでなければ「哲学」の権威づけ——と思えなくてもいいが、さらに一步踏み込む必要があるだろう。おそらく井上たちには、日本の思想やその表現である和語には西欧の文明・文化と対等に渡り合えるパワーがないと考えられていたに違いない。たとえば彼らは、「One」を「ひとつ」などとせず、「漢書」郊祀志から「泰一」（天地未分のカオス）という語を抜き出してきているし、「Beginning」も「はじまり」などとせず、大仰にも「元始」「太初」（気が初めて現象してきた宇宙の始まり）といった語を当てている。次に我々は、語のレヴェルから思想のレヴェルへ視点を移動させよう。

### 三

思想のレヴェルで言えば、どれか一つの体系性を備えた思想というのではなく、多様な中国の思想用語が総動員されている。しかし、柱と頼まれているのは儒教、特に宋明学（朱子学と陽明学）である。

まず、宋明学の最も中核的概念である「理」というタームを取り上げたい。「One and many」に、第II版では「理一分殊」という朱子学の用語がそのまま使われているが、次の三語には「理」字が砂中の金のように散在している。特に Reason の III には全ての訳語に含まれている。

Reason

I 道理、理性

II 道理、理性

III 理、道理、理性、通理、条理、義理、天理、処理、理由

Truth

I 真理、真実（四つの派生語は「〜之理」）

II 真理、真実（派生語もIに同じ）

III 理、真理、真実（七つの派生語は「〜真理」）

Principle

I 道、原理、主義（五つの派生語は大半が「〜主義」）

II 道、原理、主義（一〇の派生語の大半が「〜主義」）

III 道、原理、大本、原儀、主義（一八の派生語は「〜主義」と「〜原理」と相半ば）

やや本論から逸れることになるかもしれないが、右の三語の訳し分けを際立たせるために仮りに一語で押さえるとしたらどうなるだろうか。井上らの理解に沿って収斂して行けば、「Reason」は「理」、「Truth」は「真」、「Principle」は「道」——ということになりはしまいか。<sup>(31)</sup> こうした彼らの欧語の理解が当を得ているかどうか、西洋哲学の専門家に質したいところであるが、そのことはともかく、この三語の彼らの理解の仕方、および逆にそれを通して露呈した彼らの「理」「真」「道」という中国思想の基礎概念の理解の仕方は、一考に値する問題ではある

まいか。

かくして、「Science」は、こうした「理」を追求する学問として「理学」と呼ばれる（むろん、これは井上らの新造の語ではないが<sup>(32)</sup>）。

### Science

- I 理学、科学
- II 理学、科学
- III 学、理学、科学

「Science」に包括される個別科学が全て「理学」の名で呼ばれるわけではないが、注（4）にも示したように少なからざる「学科」に「理」字が含まれている。

「Philosophy」については、数多くの研究論文が考察しているように、明治一〇年頃に「哲学」の語が定着<sup>(33)</sup>するまで「理学」は幕末以来有力な訳語の一つであった。これもよく知られていることだが、中江兆民は随分遅くまで「理学」に固執した<sup>(34)</sup>。『哲学字彙』では次のようになっていて、IIIに至っても「理」字がしぶとく残っている。

### Philosophy

- I 哲学（一七の派生語には「哲学」「学」「理学」が混在）
- II 哲学（二一の派生語はIと同様混在）
- III 哲理・哲学（按、西周訳利学説曰、哲学即歐洲儒学也、今訳哲学、所以別之於東方儒学也）（二六の派生

語は殆ど全て「哲学」)

このように「理学」や物理学は、Reason、や Truth、や Principle、を追求する学問ということになるわけであるが、井上らのこの論理を推し進めて行くと、次に挙げる諸観念はその中に「理」字を含まぬゆえにそれら諸学の対象外ということになりはしまいか。

Existence	Substance	Reality
I 万有成立、存体、存在、生物	I 本質、太極	I 実体、真如
II (Iに同じ)	II (Iに同じ)	II (Iに同じ)
III (Iに同じ)	III 本体、本質、実体、太極	III 真実、実体、体性、本体、実有、真如

実際 Existence の場合、井上らは右のように「万有成立」という奇妙な訳語を当て、その按語(注記)に、「現象「世界」の外に、広大無辺で知ることのできないものが別に存在していて「それが万物を成立させているのだが」、それを『万有成立』と言う」と記している。(36) Existence の理解としてこれが正鵠を射ているかどうか、これも西洋哲学の専門家に尋ねたいところであるが、そのことは今しばらく措いて、井上らの理解によれば、そのものは「知ることができない」のだから諸々の「理学」研究の対象にはなりえないことになる。Reality の場合も、「真如」という仏教語に附せられた按語、「説く可からず、念ず可からず」からすると、同じような性格を持っていることになろう。

興味ぶかいのは、Substance の訳語中に「太極」の語が見えることである。「太極」は朱子学の核ともいう



べき概念であるが、朱子は「太極」に二重の性格を与えている。一つは個々の事物に内在してその事物の根拠となっているもので、これを「各具太極」と呼ぶ（「理」に同じ。田毎の月の比喩で表現されることがある）。いま一つは、それら個物の太極を総括する大元の「太極」で、これを「総体太極」と言う（上天にかかる明月の比喩）。前者は知的認識の対象となるが、後者はそれを超えていて、合一する以外に捕捉のしようがない。「豁然貫通」が言われるのは後者の場合である。この「Substance」の訳語の一つに選ばれた「太極」は後者に属しよう。ただ、奇妙なのはⅠの段階から注記に朱子の解釈を引かず、『易』繫辭伝の典拠を掲げたあとに唐の孔穎達『周易正義』を引いている事実である。

太極とは、天と地とがまだ分かれる前、元気が混然として一つになっている状態を言う。元初の太一（大いなる一者）のことである。

右の注釈に従えば、「太極」は「理」ではなく「氣」であって、存在論的根拠というより生成論的根源になってくる。「Substance」にそのような意味のあるを聞かないが、あるいは井上らは「実体学」「本体学」と訳した「Ontology」を意識していたのだろうか。いずれにせよ、『哲学字彙』では現象的、経験的世界を超えたものについては「理」を使わず、「実」「本」「体」といった語を含む訳語が選ばれている。

このように井上らは意識的か無意識的かはわからぬながら、朱子学的思惟から大きく逸れずに「理」字を使っているが、その「理」を認識する心の側についても、おおむね儒教——宋明学を下敷きにしている。まず、基本的なタームとその訳語を掲げる。

Mind

I 心、心意

II (Iに同じ)

III (Iに同じ)

Conscience

I 道念、良心

II (Iに同じ)

III 良心、本心(按、良心、本心、皆出于孟子)、道心(按、書大禹謨、人心惟危、道心惟微、注、指其発於

義理者而言、則謂之道心、道心之字、又出于荀子解蔽篇)、道念(按、宋无寄山中僧詩、道念<sup>(40)</sup>有時憐老病、塵縁勿計問真如)、恒心、良知、真心(明儒学案卷四十、夫曰真心者、虞廷之所謂道心也)

Intelligence

I 睿知<sup>(41)</sup>、虚靈(按、伝習録、心之虚靈明覚、即所謂本然之良知也)

II (Iに同じ。按語と同じ)

III 睿知、睿智、虚靈、按……(以下Iに同じ)

右の中で問題にしたいのは、Intelligence、の訳語の一つに当てられている「虚靈」という語である。この漢語は、中江兆民が「実質説」(唯物論)に對する「Spiritualism」の訳語として使ったこと<sup>(42)</sup>で知られるが、元來は宋明儒学の重要なタームであった。井上らが右のように王陽明の『伝習録』を引いたのは、そこに「本然の良知」

(心に本来的に備わっている知的、感覺的、道德的はたらき)があつたからであろうが(それなら逆に、何故初めから「虚靈」に代えて「良知」としなかつたのかという疑問が起こるが)、もともとこの語は朱子学の用語であつた。<sup>(43)</sup>

心の虚靈知覚は一なる而已矣。(『大学章句』)

明德なる者は、人の天より得る所にして虚靈不昧、以て衆理を具して万事に應ずる者也。(『中庸章句』序)

朱子によれば、心——というより心臓には一寸四方の虚ろな空洞があつて、そこにあらゆる事物の「理」が先験的にびっしりと宿っており、人間の道德性や「理」の認知能力、ひいては、目まぐるしく変化する多様な現実にもまた対応してゆく能力などは全てそこに由来するとされる。<sup>(44)</sup> 右に「衆理を具して万事に應ず」とあるのはそういう意味である。ただし、それは時として欲望などのために鈍麻する危険性を孕んでいる。こうした「虚靈」の性格は、智慧というレベルでは「Intelligence」と共通の部分があるにしても、構造的にはもとより「equivalent」ではない。

同じことは「Perception」についても言える。

## Perception

### I 知覚力

### II 知覚力

### III 知覚(中庸序、心之虚靈知覚一而已矣、而以為有人心道心之異者、則以其或生於形氣之私、或原於性命之

正、而所以為知覺者不同)

訳語として定着し現代に至っているこの「知覚」は、右の按語に示されているように例の朱子の語である「虚靈」と四字句を構成していて、元来は道徳的判断力といったニュアンスが強い。もっとも、朱子には他に「知覚運動」という用法もあり、常に倫理的な磁場で使われるというわけでもない。

今日、一般に「人間性」と訳されている、「Human nature」には、I II IIIとも「性」「人性」の語が当てられ、全三版とも按語に宋儒陳淳の説を引いている。陳淳の説は中国最初の哲学辞典『北溪字義』からの引用で、人間の本性は善か悪かをめぐる論争史を簡略にまとめたものであるが、井上らは長文にわたると考えたのか、肝賢の程朱の説まで及んでいない中途半端な引用をしている。そのことはともかく、「Human nature」は、ここでは中国的な性説の文脈の中で受け留められているわけである。ほかに次のような例がある。

### Erkenntnis

- I (項目なし)
- II (項目なし)
- III 認識、体察、体認

右の「体察」「体認」は宋明儒学固有の語であって、いわば頭だけでなく身体ごとの了解を意味し、一歩進めて言えば、実践への志向がすでに孕まれている。なお、「認識」は「Cognition」の訳語にも使われているが、そ

こには「体察」や「体認」の語が見えない。

儒教用語としては、ほかにも「Education」に対する「教育」(『孟子』の語)、「Ethics」に対する「倫理学」(「倫理」は『礼記』の語)、「Right」に対する「権利」(『荀子』の語)、「Society」に対する「社会」(『近思錄』の語)等々があり、少なからざる近代用語が儒教から選ばれている。

これは儒教用語を典拠とするものではないが、儒学思想と訳語とを結びつけている例を追加しておこう。

### Idealism

I 唯心論(按、人之於物、止知其形色矣、至其实体、毫不能窺、故古来有唯心之論、王守仁曰、心即理也、天下又有心外之事心外之理乎)

II (Iに同じ、按語も同じ)

III 唯心論(按語はIに同じ)、理想論

右の場合、「唯心論」の典拠を按語に出さず、代わりに王陽明の有名な一句を引いている。井上らは、ここで四重の誤りを犯しているのではあるまいか。一つは「唯心論」の訳語上の典故(so)を引かなかったということである。これはまあよい。本書は、全ての訳語についてその素姓を明記しているわけでもないのだから。しかし、按語前半の「Idealism」の説明はどうだろうか。人間は事物に対して、その外面的形態を知るだけでその「実体」(「Substance」や「Reality」の訳語にこの語があったことを想起されよ)は認知できないから「唯心論」が生まれる、というのはまっとうな理解と言えるだろうか。三つ目はその説明と後半に引用の王陽明の心即理説との齟齬である。「理」はあらかじめ設定された外的規範ではなく、生きた心のはたらきがそのつど決定してゆくものとする心即理説と、

「実体」不可知論とは全く没交渉である。四つ目は、「Idealism」を心即理説で受け留めている当の点である。現代の中国の哲学界でも陽明学と唯心論とを短絡させているが、佐野公治氏が明解に説破しているように、「そもそも存在論的問題関心がないところに、唯物論・唯心論という存在論上の性格規定は適用できないのである」。

ちなみに、「Mateliasm」の訳語は「唯物論」(Ⅲで「物質論」追加)であり、その按語は全三版とも共通で、「物」は一つなのにそれが見方によってさまざまな姿を取るところから「唯物論」は生じる、と述べている。ここでは、その「」を以て言えば「」の観点から言えば」という文体それ自体が宋学的だということを指摘しておきたい。

なお、日本の儒者としては例外的に伊藤仁斎の著述から数例引かれている。

#### 四

儒教に比べると、仏教に対する依存度はそれほど高くはない。次のような訳語は、現代用語としてもすっかり定着している。一つ一つ厳密な戸籍調査を行なう必要はあるものの、これらの語(今まで挙げてきた儒教語の多くもそうであるが)は、もともと西欧語の翻訳語として出発し——つまりは西欧思想という新たな生命を吹き込まれて再生され、後に母胎としての西欧語から離陸して日本語圏へ飛び立って行った言葉であろう。

#### Absolute

I 絶対(按、絶対、孤立自得之義、对又作待、義同。絶待之学、出于法華玄義)、純全、専制(政)

II (按語に至るまでIに同じ。ただし、「全齊」の語追加)

III 絶対(按、絶対、孤立自得之義、対又作待、義同。金剛略疏、真如絶対、至理無言)、自存、純全、全齊、  
専制

右の「絶対」の場合、I・IIからIIIに至る間に典拠が『法華玄義』から『金剛略疏』に変わっている。

### Consciousness

I 意識

II 意識

III 意識(按、勝鬘經、於心相統、愚闇不解、不知利那間意識境界、起於常見、妄想見故)、識感

“Religion”はすでに引用済みであるが、今日我々は、「宗教」や「意識」という語から仏典に想到することもないし、ただちに“Religion”や“Consciousness”を思い浮かべてこれらが元来翻訳語であったことを確認したりはしない。

“Nation”に対して、IIIでは「国」「国民」を当て、「国民」の出典として『無量寿經』を引いているが、「国民」は何も仏典を引かずとも『春秋左氏伝』などに見える古い漢語である。

おもしろいのは、儒教系の語と仏教系の語とを仲良く共存させている例のあることで、少しでも共通項があればその背後の思想的差異には目を瞑るといふ、これもまた井上らの翻訳の姿勢の一つと見なしうらるだろう。先にも引いたが、“Reality”のIIIの訳語には「真実」と「真如」とが同居している。「真如」には按語がつけられ、「当

に知るべし、一切法は説く可からず、念ず可からず、故に名づけて真如と為す」という『大乘起信論』の語句が引かれてゐる。一方、「真実」には注記がないが、この語は仏典にないことはないもの、<sup>(56)</sup> 正統的典拠は『中庸章句』第二十章、「誠なる者は、真実無妄の謂、天理の本然也」という朱子の語であろう。「虚靈」については以前に言及しておいたが、これが「法身」と同居している例がある。

### Spiritual existence

- I 虚靈
- II 虚靈、法身
- III 虚靈、法身

老荘思想の用語もかなり使われている。「Ambiguous」に対する「滑疑」は『莊子』の語(既引)、「Becoming」に対する「転化」は「淮南子」の語、「Beginning」に対する「太初」は『列子』の語、「Change」に対する「万化」は『莊子』と『陰符経』の語……といった具合である。

語句ではなく思想を借用している例がある。

### Infinitive vision

- I 無限觀(按、莊子大宗師、朝徹而後能見独、見独而後能無古今、無古今而後能入於不死不生)
- II (按語ともIに同じ)
- III (按語ともIに同じ)



右の場合、「無限観」という訳語は妥当であるにしても、その解説として『莊子』の語を引くのは正しくはなからう。この大宗師篇の文章は、悟道した人は古今や生死の対立を超越すると言っているのであって、その対立のない境地をただちに「無限観」と呼ぶことはできない。用語の混同も見られる。

たとえば、「the seven sages of ancient Greece、（古代ギリシヤの七賢人）などと言われる場合の「Sage」である。

### Sage

I 至人（按、莊子田子方、得至美而遊乎至楽、謂之至人）

II （按語ともIに同じ）

III 聖者、賢人、古賢、智者、至人、按……（以下Iに同じ）

この場合、初め「至人」で受け留め、後に「聖」と「賢」といった儒教系の語が追加されていったわけだが、世俗を出て自由無碍の境地を楽しむ道家の「至人」と、世俗内に留まって人倫の道を追求する儒家の「聖」「賢」とでは、随分中味が違うはずである。

他に、「Egoistic altruism、にはI・IIで「兼愛主義」を当て、按語に『墨子』を引いている（IIIではその項目自体が消失）。

## 五

井上らはこのように、みずからが内容的に *equivalent* とする語を大量に中国の古典から探し出してきた。しかし、彼らの取った方法はそれだけではなかった。彼らは古典から言句だけを借用し、そこに違った意味を新たに盛るといふやり方も採用している。その一例が次の「帰納法」である。

### Induction

- I 帰納法（按、帰、還也、納、内也、韻書、以佐結字、故云帰納、今仮其字而不取其義）
- II （按語ともIに同じ）
- III 帰納（按語はIに同じ）、還元、感応

「帰納」は按語に言うように元来は音韻学上のタームであつて、西欧の論理学上のタームである。Induction、とは内容的にまったく没交渉であつた。それを示す注意書きが「今、其の字を仮りて其の義を取らず」である。器としての文字だけ借用して中味は別のものに入れ換える、と言っているのである。同じような注記は「Motive、に対する「動機」にも見られる。

### Motive

- I 動機
- II 動機

III 動因、動機、列子天瑞篇云、万物皆出於機、皆入於機、注、機者群有始動之所宗云云、今取其字而不取其義)

しかし、いちいち注記していなくとも、事実上、「其の字を仮りて其の義を取らざ」る訳語は少なくない。

### Principle

III 道、原力、原理、大本、原儀、主義（按、汲冢周書諡法解、主義行徳、曰元。主義謂口義為主、今日主義者、主要之義也）

### Category

I・II・III 範疇（按、書洪範、天乃錫禹洪範九疇。範、法也、疇、類也）

“Principle”は先にも引いたが、その訳語の一つである「主義」は『哲学字彙』では右のように『汲冢周書』から取ったと述べている。<sup>(58)</sup>この原典の文意は、正義を前面に押し出し徳政を行なった王には「元」という諡おくりなを与える、というもので、今日の近代用語としての「主義」とは全くあい涉らない。「範疇」にしても、『書経』の「洪範九疇」（天下統治のための、洪おほいなる九疇のりの範）から二字を取って再構成したもので、西欧の哲学用語としての「カテゴリー」<sup>(59)</sup>と equivalent であるはずがない。

井上らは意味上であれ文字上であれ、全て中国の古典に根拠を仰いだわけではない。一応典籍は踏まえながらも自分たちで組み換えを行なって新語を造っている場合がある。いま右に挙げた Motive に対する「動機」もそうだが（『列子』には「動機」という熟語は存在しない）、もう一、二例を引いておこう。

## Heterogeneity

I・II・III 厖雜（按、厖、雜也。書周官、不和政厖。厖、一作龐）

この場合、典拠として引かれている『書経』周官の一句（和せざれば政厖<sup>みた</sup>る）から「厖雜」という訳語が出てくるわけではない。按語に言う「厖、雜也」という訓詁は『書経』ではなく、『文選』所収の王褒の「四字講徳論」の一句、「厖眉耆考之老」に附された李善注、「厖、雜也、謂眉有白黒雜色」に由来し、この「厖とは雜なり」の二字を結びつけて一語としたものであろう。

いま一つ、「Nature」の訳語を取り上げてみよう。この「Nature」の翻訳には、大袈裟に言えば翻訳という営為を通して、日本の西歐化そのもののありようが歪みも伴いつつ凝縮された形で潜んでいると思われるのであるが、小論の手に余るこの問題については、柳文章<sup>やなぢ</sup>氏の労作『翻訳の思想——「自然」とNATURE』などに譲るとして、ここではさしあたり次の二点を指摘しておきたい。

『哲学字彙』では、次の引用に明らかのように明治四五年の第III版になって初めて「自然」の訳語が現われる。では、それまで訳語として「自然」は全く顧慮されなかったのかと言うとそうではなく、「Natural」の訳語としてすでにI・IIで姿を現わしているし、「Natural selection」はI・II・IIIを通じて、「自然淘汰」である。<sup>(82)</sup>つまり、井上らは「自然」なる漢語を名詞として実体的に捉えることに明治四五年までためらったのである。<sup>(83)</sup>

もう一つ注意を喚起しておきたいのは、「Nature」は今では殆ど「自然」に一本化されているが、『哲学字彙』では実に多面的な訳語が案出され、種々の角度からネイチャーを捕捉せんとしていることである。筆者は先に「帝大教授のペダントリー」などという言い方をしたが、それはこの場合には妥当せず、むしろ明治の先覚者たちの苦

心の跡がしのばれる。

小論で述べたいのは問題の多いこの「自然」なる訳語ではなく、今では消滅してしまったそれら他の訳語の方——特に「物然」という語の素姓である。前置きが長くなったが、訳語は次のようになっている。

Nature

I 本性、資質、天理、造化、宇宙、洪鈞、万有

II (Iに同じ)

III 物然、性、本性、性質、性格、資質、天理、造化、宇宙、洪鈞、万有、自然

私の結論は簡単である。「物然」<sup>ぶつぜん</sup>は『莊子』からの合成語なるべし、というものである。

物固有所然、物固有所可、無物不然、無物不可。(『莊子』齊物論)

——物には本来、その物のあり方以外にありようのないものが備わっており、そのあり方を可<sup>よ</sup>しとして肯定されるものが備わっている。どんな物でもその物のあり方で存在しており、どんな物でも可<sup>よ</sup>しとされない物はない。

右は仮りの訳を示したままで、井上らが「物然」にどういう意味を籠めていたかはわからない。あるいは「物としてのあるがままのあり方」という意味に取っていたのかもしれない。IIIの冒頭に置かれ、末尾の「自然」を牽制しているか見えなくもないこの「物然」は、いつのまにか淘汰されてしまった。

次に、私の気づいた造語とおぼしい訳語を幾つか列举しておく。

Absolute 全齊 (II・III)  
Energy 勢用 (III)  
General 全関 (II・III)  
Indifference 捨状 (III)  
Person 身位 (II・III)  
Principle 原力、原儀 (III)

## 結 び

異文化の移植という問題を考える場合、中国の仏教受容が一つのモデルを提供してくれる。仏教の伝来初期、中国人はこれを自国の類似の教えで受け留めようとした。最も初期の仏教信者として知られる後漢の楚王英（明帝の異母弟）の奉仏の様子は、次のように記録されている。

楚王は黄老の微言を誦し、浮屠（<sup>フツト</sup>II 仏<sup>ブツ</sup>）の仁祠を尚<sup>たつと</sup>び、絜（<sup>ツキ</sup>II 潔）齋すること三月、神と誓を為す。（『後漢書』楚王英伝）

ここでは、仏教は「黄老」（黄帝・老子の教え）とあいともに崇められているだけでなく、「仁祠」とあるように生を好み殺を憎む儒教教義と同一視されており、仏陀が「神」と捉えられている。

やがてその教義が中国社会に浸透しはじめると、中国の知識人はこれを自国の思想——特に老荘思想の用語で置き換えて理解しようとした。“bodhi”（菩提）を「道」、*nirvana*（涅槃）を「無為」と訳したときはその顕著な例である。こうしたいわゆる格義仏教（老荘や『易経』をベースにした折衷的な仏教理解）は、四世紀、道安が登場した頃から反省され、仏教をその原義に即して理解しようとする動きが出てくる。ここから中国仏教のテク・オフが始まると言われるが、しかしいくら格義仏教から脱皮したといっても、サンスクリットの漢語化という事実は消し去りようがない。ひとたび仏典が漢訳されるや、仏教はインド思想から切り離されて中国の漢字世界に組み込まれてゆく。そうになると、中国人は仏教教義を理解するのの際して、元のサンスクリットの文脈には帰らず、むしろ自国の精神世界にフィードバックして行ったのである。あれほどおびただしい仏典が将来されたにもかかわらず、それらの殆どが姿を消してしまったという事実はそれを傍証しよう。一旦漢語化されてしまえば、原典はもはや無用の長物になったのである。そこから仏教の中国化が始まり、その行き着くところ、禅というすぐれて中国的な仏教も生み出されたのであった。

ひるがえって、一九世紀の日本はどうであったか。

我々が取り上げた『哲学字彙』という事例で言えば、すでに分析したように主として宋明の儒学用語によって西欧のテクニカル・タームが受容された。しかしながら、その訳語としての漢語から当時の知識人は一体どれだけ中国の精神世界にフィードバックできただろうか。「虚霊」という語から何人のひとがただちに『中庸章句』や『伝習録』に戻れただろうか。そこには、古代の中国知識人が「無為」という訳語から「道は無為にして為さざる無し」という『老子』の句を瞬時に想到しえたのとはおのずから逕庭がある。宋明学や儒教といっても、日本人には所詮は外来思想なのである。

とは言っても、すでに数百年も漢字文化に浸っている日本人には、たとえ元の意味や思想体系に戻れずとも、ある漢語がどの方向を指し示す語であるかは容易に嗅ぎ取る力が備わっている。中国思想の箍たぶはそれほどきつくはないし、漢語に対する嗅覚は鋭敏である——こういう位置に居た日本人は、漢語の指し示す意味の針路を中国から本家の西欧の方へ絶えず振り向ける自由を確保しえていたのではないだろうか。「其の字を仮かりて其の義を取らず」という例の注記は、幾つかの特定の語だけの話なのではなく、このように漢語を記号化(64)してしまふ翻訳の姿勢そのものを言い表わしているように思えてくる。そういう姿勢を取れたからこそ、漢語という皮袋に盛られた中国の酒を徐々に西欧の酒に入れ換えることができたのであろう。むろんそこに、漢語の独り歩きや勝手な思い込みなどに由来する詰め換えのミス——「誤解」という現象が随伴したことは当然認めなければならぬ。

今度は少し角度を変えて『哲学字彙』の翻訳法を眺めてみよう。宋の法雲が一一四三年に編んだ仏教用語辞典『翻訳名義集』を見ると、音訳語が大部分を占めているのに驚かされる。我々の『哲学字彙』は音訳かといえば、今までの検討からわかるように人名を除いて全て意識で貫かれていた。意識語の場合、原語との間に一種不透明な膜が介在するのに対して、音訳語は一種の透明体となつてただちに原語を現前させるから誤解の危険性が少ない。しかし逆に、音訳語それ自体からは意味の影すら引き出せないのに対して、言うまでもないことながら意識語はそれ自体意味を体現している。清野勉は、欧語の翻訳は国語の将来と密接に関わると喝破したけれども、井上哲次郎や訳語会の人々をはじめ、明治の多くの知識人たちが西欧語の意識に骨身を削つたのは、西洋文明の移植は西欧語の国語化抜きにはありえないという見通しを抱いていたからではないだろうか。果たして、意識によって無数の近代西欧語は国語の中に確固たる地歩を占めるに至つた。見かけは漢語だがその素性は西欧語だと殆ど気づかれぬほどに。「意識」「概念」「交通」「経済」「教育」「理性」「人格」「自由」「革命」等々、挙げてゆけばきりがなし。漢



語は訳語を通して日本語になったわけである。もし音訳の方を選んでいたら、西欧語は一部知識人の専有物になっていて、これほどの社会性を獲得するには至らなかつたであろう。当今、欧米語の音訳（片仮名）が日常化しているのは時代が違ふのである。

『哲学字彙』の語訳をはじめ、明治の先人たちが工夫した意識語には後日談がある。既述のように近代的タームとして新たな生命を吹き込まれた多くの漢語は、日清戦争後、中国へ逆輸入される。中国人は、それら翻訳後の多くが本来は自国出身の古い言葉であるにもかかわらず、新しい意味の盛られた近代用語として理解し使用し、現在に至っている。たとえば「革命」という語は、『易経』の革の卦の象伝に、「湯武（殷の湯王と周の武王）命を革め、天に順いて人に応ず」という典拠がなければ生まれなかつたし（原義は天命を革める）、日本人によって『Revolution』の訳語として再生されなければ、今日のような意味を持ちえなかつたはずである。日本人の創案した翻訳語は中国大陸のみならず、朝鮮半島へも伝わった事実を付け加えておこう。このことは、わが国一九世紀以来の翻訳作業がある普遍性を備えていたことを結果的に証明していよう。

しかしながら、日本加工の訳語の全てが、日本人がそこに籠めた意味のままに使われているとは限らない。たとえば「文化」という語は、中国では「Culture」の訳語であると同時に、一方で中国古来の用語法が絡まって「武」が意識されている。「プロレタリア文化大革命」がそのよい例で、そこには文化的、精神的領域の革命という意味のほかに、武闘によらざる革命という含意もある。 「文明」という語も、辞書には硬いことが書いてあるが、日常のレヴェルでは「文明礼貌」（モラルとエチケット）、「文明待客」（ていねいに客に応待せよという商店の標語）など、日本より使い方がくだけている。

このように、中国に渡った翻訳語からまた新たな「誤解と創造性」の話が始まるのであるが、このテーマについ

ては次の機会に譲らねばならない。

## 注

(1) 当時の学術語制定の動きを、斎藤毅『明治のことば——東から西への架け橋』講談社、昭和五三(一九七八)年、三一頁より借用して転載しておく。これを見ればわかるように、井上らのこの仕事は、用語制定という当時の大きな潮流と連動していたのである。

- 明治四(一八七二)年 文部省『解体学語箋』  
明治六(一八七三)年 奥平虎章訳『医語類聚』(明治一一年増訂)  
明治七(一八七四)年 宮里正静『化学対訳辞書』  
明治七(一八七四)年 伊藤謙『薬品名彙』(明治一六年増訂)  
明治一(一八七八)年 山田昌邦『英和数学辞書』  
明治二(一八七九)年 武藤寿『金石対名表』  
明治三(一八八〇)年 横井時庸『機関名称字類』  
明治三(一八八〇)年 K. Matsuoka『英和通商字典』  
明治一四(一八八二)年 江馬春熙『洋和薬名字類』  
明治一四(一八八二)年 参謀本部『五国対照兵語字書』  
明治一四(一八八二)年 井上哲次郎等『哲学字彙』  
明治一四(一八八二)年 矢田堀鴻『英華学芸辞書』

明治一六（一八八三）年 伊藤謙『増訂薬品名彙』

明治一七（一八八四）年 T. Iwakawa『生物学語彙』

明治一七（一八八四）年 井上哲次郎等『改訂増補哲学字彙』

明治一七（一八八四）年 矢田堀鴻『英華學術辞書』

明治一九（一八八六）年 工学協会『工学字彙』

明治二一（一八八八）年 物理学訳語会『物理学術語和英独仏対訳辞書』

明治二一（一八八八）年 磯田四郎『民法応用字解』

明治二四（一八九一）年 東京化学会『化学訳語集』

(2) 筆者が使用したのは全三版とも昭和五五（一九八〇）年刊、名著普及会の覆刻版である。

(3) William Fleming, *The Vocabulary of Philosophy, Mental, Moral, and Metaphysical, with Quotations and References; For the Use of Students*, 1856 (first edition). 飛田良文『哲学字彙訳語総索引』笠間書院、昭和五四（一九七九）年の「解説」による。

(4) 第I版の「緒言」より学科名を転載しておく。

(倫) 倫理学、(心) 心理学、(論) 論法、(世) 世態学、(生) 生物学、(数) 数学、(物) 物理学、(財) 理財学、(宗) 宗教学、(法) 法理学、(政) 政理学

(5) 冒頭に以下の記事が冠せられ、この「音符」の素姓が明かされている。Chinese Symphonious Characters. From Naitia Simic

Translated by J.G. Bridgman.

(6) さしあたり、馬祖毅『中国翻訳簡史』中国对外翻訳出版公司、一九八四年、第五章、「從鴉片戰爭到五四運動前的翻譯活動」

参照。古いところでは、徐宗沢『明清間耶穌会士訳著提要』中華書局、一九四九年、がある。また、増田渉『雑書雑談』汲古書院、一九八三年、同「梁啓超の『西学書目表』」、『中国文学史研究』岩波書店、一九六七年、所収も参考になる。

(7) 現代中国語では一般に「康德」と訳している。

(8) 原書は、Ernest J. Eitel, *Hand-book of Chinese Buddhism*, Tokyo Sanshusha (三秀舎) 1904. 『哲学字彙』の附録は、「序文」に言うようにこれを筆写したのだが、漢字だけ残して英文の説明は省いている。また、原書の経典も見出しから落とされている。

(9) 彼らの略歴については前掲飛田良文の「解説」、および覆刻版同氏「解題」を見よ。

(10) 前掲覆刻版飛田氏「解題」に言う、「(第Ⅲ版の)増補見出し六〇二五のうちドイツ語表記の見出しが二四六八へ大見出し二〇一四、小見出し四五四〇含まれており、編者のドイツ哲学への関心の高さを示している」。

(11) 筆者が見たのは前述したように覆刻版で、この第Ⅲ版は大正一〇(一九二二)年の再版を底本にしている。しかし飛田良文氏の調査(前掲書「解説」)によれば、明治四五年版と大正一〇年版も内容的には全く変わらない由である。

(12) 飛田良文氏の調査によれば、増加のようすは以下のようになっている(覆刻版「解題」)。

大見出し 小見出し

I 一五六二 三九〇

II 二一九七 五二六

III 六五四八 二一九二

(13) この Sociology の訳語の変遷については、斎藤毅前掲書、二二四―二二五頁を見よ。

(14) 『哲学字彙』に注記はないが、劉正埭・高名凱他『漢語外来詞詞典』上海辞書出版社、一九八四年、は、"Culture" の訳語

「文化」は日本渡来の外来語だとする一方、「古代漢語」の用例として以下のように晋の束皙「補亡詩」の詩句を挙げる。「文化内輯、武功外悠」。なお、本邦ではこれより先、江戸時代に年号として使われている。中国には「文徳」「文明」はあっても「文化」という年号はない。

(15) 「漢語」は、現代中国では現代中国語の意味であるが、小論では中国古典語（現代中国では「古代漢語」と呼ばれる）と、漢字によって構成された語という両義で用いる。

(16) 『哲学字彙』Ⅲは、出典として『西域記』巻七、「転妙法輪、開化含識」を引く。なお、「開化」という語は朝鮮の近代史においては特別の重みを持っていた。詳細は姜在彦『朝鮮の開化思想』岩波書店、一九八〇年、を参照されたいが、いま取りあえず同書から用語法の要点だけ書き抜いておく。「要するに開化という用語にたいする一八九〇年代後半期からの一般的理解は、ほぼ物的開化としての〈開物〉（『易』繫辭伝、〈開物成務〉）、人的教化としての〈化民〉（『礼記』学記、〈化民成俗〉）を結合した用語として定着している。開化派にとつての〈開物〉とは、国内資源の開発による産業の近代化であり、〈化民〉とは啓蒙と教育による人間の意識と知識の近代化をいうのであった」（一七七頁）。

(17) 『哲学字彙』Ⅲは、出典として『易』乾卦文言伝、「見龍在田、天下文明」を引く。

(18) 本邦における「文明」「文化」の確執については、西川長夫氏が高等研・国際シンポジウム「一九世紀日本の翻訳の問題」において極めて奥の深い考察を披露された。

(19) この「合」は「当」の意。「まさに死すべき」。

(20) 日中の「的」の用法の相違について鈴木修次氏は言う、「名詞と名詞との間に〈的〉を用いると、中国では〈…の〉〈…の〉に関する〈…〉についての〈…〉などの意味になる。〈的〉にはまた、形容詞（形容動詞を含む）・副詞にそえて、それが形容詞・副詞であることを示したり、形容詞句・副詞句を作ったりする役割がある。中国語で〈可愛的人〉といえば、〈へいとしい人〉

〈かわいい人〉である。…日本人は、中国語の〈的〉を正しく理解せず、日本人独特の〈的〉の用法を作り出した。それは、ものごとを明快にいきらずになるべく幅をもたせていおうとする性癖、あるいはまた、常にある種の〈へにじみ〉をただよわせようとする日本人の好みをそのままに示したことばであった」（『漢語と日本人』みすず書房、昭和五三（一九七八）年、一〇—一三頁）。また、広田栄太郎『近代訳語考』東京書籍、昭和四四（一九六九）年、に所収の「〈的〉という語の発生」も参照。なお、逆に中国語で「神のような存在」と言おうとするなら、「有神性的存在」などと語を補わねばならない。

(21) 斎藤毅前掲書、第一章「主義」という重宝なことばの誕生」による。同書、二七頁にも言う、「明治期にあっては、〈状的〉（*-tic, ic*）、〈性〉（*-ity*）、〈主義〉（*-ism*）、〈化〉（*-ize*）などの語を付加することによって、東洋に少ない観念語の造成に成功してさえいる」。

(22) たとえば、

### Egoism

I 主我学派、自利主義

II 主我学派、自理主義

III 自利説、主我説、利己主義、愛己主義

(23) 「功利」は、古くは『管子』などに用例が見えるが、これが中国思想史上に定着するのは、朱子が陳亮らの永康・永嘉学派を「事功」または「功利」派と決めつけ批判して以来のことである。「事功」主義ないし「功利」主義と Utilitarianism とはおのずから内実を異にする。庄司荘一「朱子と事功派」（『朱子学大系』第一巻、明德出版）、王文亮「南宋事功学論稿」（一九八六年、中山大学碩士生畢業論文、未刊）等を参照。

(24) 西周「学原稿本」による。また、杉原丈夫「明治初期以前における西洋哲学用語の形成」（『岡山大学法文学部学術紀要』第

四〇号、昭和五四（一九七九）年）、三頁を参照。

(25) たとえば、「さりながら、どこまでも本真<sup>ホンマ</sup>ノ訓積ヲ降サズト云フノ主義ナランニハ……」（清野勉「哲学字彙ノコトヲ論ジ併セテ世ノ言語改良家ニ告グ」『明治哲学思想集』筑摩書房、昭和四九（一九四四）年）。また、杉原丈夫前掲論文、三頁参照。

(26) 杉原丈夫前掲論文、三頁。

(27) 「嚴括」は「肅括」の引用ミス。

(28) 平明ゆえにわが江戸時代にもよく読まれた林希逸の荘子注、『南華真経口義』のこと。

(29) 「理一分殊」は、言葉としては四世紀晋の謝安の詩句に「万殊は一理に混ず」（蘭亭）とみえるが、これを哲学として高めたのは北宋の程伊川である。朱子学では、窮極の理（太極）は一つでありながら同時にそれがまるごと万物に具在していることをいう。IIIでは「単一分殊」になっている。

(30) ちなみに、英語圏におけるスタンダードな中国哲学史である馮友蘭（Derk Bodde 訳）*A History of Chinese Philosophy*, Princeton University Press, 1973 では、朱子の「理」を、Principle、と訳している。

(31) 西周は次のように述べている。「蓋シ歐洲近來の習にては、理を二つに言ひ分けたり、例すれば英語のヘレーズン<sup>ヘラウ・オフ・ネチュール</sup>……の如し、ヘレーズン<sup>ヘラウ</sup>は泛用にて道理と訳し、局用にて理性と訳す。此理性とは人性に具はる是非弁別の本原にて、所謂人の以て万物に靈たる所以を指し、泛用の道理とは見解にも為よ、決定にも為よ、説にも為よ、弁解にも為よ執りて以て其地を為す者を指すなり、斯く字義を広く用ゐたる時は……人心に是と定めたる者ならては指さず、故に此理性道德と云ふ字義の内には、天理天道など云ふ意は含まぬ事と知る可し、然て一方のヘネチュラル・ラウ<sup>ヘラウ</sup>と云ふは理法と訳す、直訳なれば天然法律の義なり、……此外に又ヘフリンシブル<sup>ヘラウ</sup>……原始の義にて元理と訳する辞有り、又主義なども訳し、何にても本つく所を指せば、必理のみにも非れとも、理の時は例すれば仁とか義とか云ふ如き、元始と立つる理条を指す也、又此外に

へアイデア」……今観念と訳す、是は理の字と余り関渉無き様に見ゆれと、深く宋儒の指す理と同一趣の理を徴する語と成れり……」〔尚白割記〕『西周全集』第一巻、西周記念会、一六九—一七〇頁。

(32) 西欧学を初めてまとまった形で漢語に置き換えた最初の文献といわれる、艾儒略(アレーニ)の『西学凡』(一六二三年序)に次のような用例がある。「理学者、義理之大学也、人以義理超於万物、而為万物之靈、格物窮理、則於人全而於天近、然物之理、蔵在物中、如金在砂、如玉在璞、須陶之以斐祿所費亞(Philosophia)之学」(斎藤毅前掲書、三一八頁、より引用)。

(33) 斎藤毅前掲書、第一〇章「哲学語源」、また、佐藤全弘「思想の翻訳・翻訳の思想」〔『近代風土』第三六号、平成二年(一九九〇)年〕等を見よ。

(34) 『理学沿革史』(明治一九(一八八六)年)、『理学鉤玄』(明治一九年)。しかし最晩年の『一年有半』(明治三四(一九〇一)年)では「哲学」の語を使っている。中江兆民における「理学」の意味については、宮村治雄『理学者兆民』みすず書房、昭和六三(一九八八)年、が詳しい。

(35) 按語の原文は次の如し。「現象之外、别有広大無辺、不可得而知者、謂之万有成立、成立之字、出于李密陳情表」(I・II・III、ただし「成立之字」以下はIIIのみ)。

(36) 「按、起信論、当知一切法不可説、不可念、故名為真如」(I・II・III)。

(37) 友枝龍太郎氏は次のように言う、「朱子はこのへ一理——万理へ総体太極——各具太極の関係を大学或問では、へ所以然の故——所当然の則」という型で捉え、これに対応する意識の型をへ悟覚知——反省知として捉えている。そうして一事一物の理を窮める反省知が積み重ねられると、豁然として貫通する悟覚知が現前すると理解した。ここに存在の側におけるへ所以然の故——所当然の則へ一理——万理へ総体太極——各具太極は意識の側におけるへ悟覚知——反省知の構造と照応することになる」〔『朱子の思想形成』春秋社、昭和四四(一九七八)年、一九八頁)。

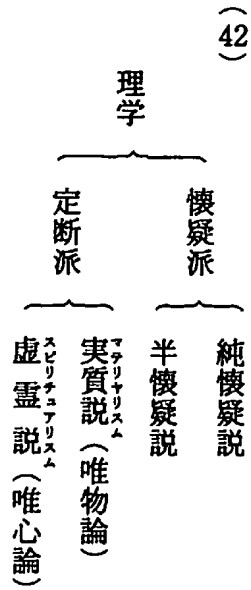


(38) 朱子は「太極図解説」で「太極」を解して言う、「造化之枢紐品彙之根柢也」。

(39) 『哲学字彙』Ⅲとはほぼ同時期に書かれた朝永三十郎『哲学辞典』明治三七(一九〇四)年、第一版序は、「Substance、を「本体」または「実体」と訳して次のように解説している。「(一)本質と同義。即ち事物中の常住にして欠くべからざる性質又は要素(以下略)。(二)性質又は作用の支持者たる基体(Substratum)若くは実体(Entity)をいふ。即ち、作用に対して作用者、活動に対して活動者、用に対しては体、を指さす(以下略)。(三)他に依存せず、其自身に存在するを得べき者(以下略)」(以上の引用は大正一三(一九二四)年の増訂版による)。井上らの書と朝永の書は性格を異にするが、両者の訳語の比較作業は、哲学用語確定の歩みを知る上でも有益であろう。

(40) 「塵縁」と対になっているこの「道念」の「道」は、仏教・老荘の方の「道」であるから、ここにこの用例を引くのは不適當である。

(41) 『易』繫辭上傳に言う、「古之聰明叡知神武而不殺者夫」。



(中江兆民『理学鉤玄』第二章。また、『中江兆民全集』の「月報六」に所収の、船山信一「中江兆民の哲学的唯物論」を参照した)。

(43) 「虚霊不昧」は、わが太田錦城が指摘するように(『疑問録』『大智度論』を出典とする。「虚霊」は、道教經典『黄庭内景経』務成子注叙にも次のような用例がある。「又当先求感応、推訊虚霊者乃佳也」。また、華嚴宗の澄観(七三八—八三九)「心

要」に「靈知不昧」の句があるが（柳田聖山『ダルマ』講談社、一四〇頁）、これを哲学的タームに高めたのは朱子である。

- (44) 以下のような朱子の語を参照。「虚靈自是心之本体、非我所能虚也、耳目之視聽、所以視聽者、即其心也、豈有形象、然有耳目以視聽之、即猶有形象也、若心之虚靈、何嘗有物」（『朱子語類』卷五―三九条）、「凡物有心、而其中必虚、如飲食中雞心猪心之属、切開可見、人心亦然、只这些虚处、便包藏許多道理、弥綸天地、該括古今、推広得來、蓋天蓋地、莫不由此」（同卷九八―四二条）。

- (45) たとえば、「知覚運動、陽之為也、形体、陰之為也」（『朱子語類』卷三―一九条）、「他仏家都從頭不識、只是認知覚運動做性」（同卷二二六―二四二条）。

- (46) 「按、陳淳曰、荀子便以性為惡、揚子便以性為善惡渾、韓文公又以為性有三品、都只是說得氣、近世東坡蘇氏又以為性未有善惡、五峰胡氏又以為性無善惡、都只含糊、就人与天相接处、捉摸說箇性」（句読は引用のまま。なお、IIIでは末尾の「箇性」の二字を欠く）。

- (47) 蔣礼鴻は敦煌變文から明代の小説に至る「体」の用例を引き、俗語では「査察」の意とするが（『敦煌變文字義通釈』第四次増訂本、上海古籍出版社、一六一頁）、宋明学ではこの文字に文字通り身体性を籠める。たとえば次のような問答を見よ。「問、物有未体、則心為有外、此体字是体察之体否、曰、須認得如句喚体察、今官司文書行移所謂体量・体究、是这样体字、或曰、是将自家这身入那事物裏面去体認否、曰、然、猶云体群臣也」（『朱子語類』卷九八―六三条）。

- (48) IIIでは『荀子』勸学篇の用例を引いたのち、次の按語を附す。「万国公法、始仮用此字」。

- (49) IIIは以下の典拠を引く。「近思錄卷九、二程全書卷二九云、郷民為社会、為立科条、旌列善惡、使有勸有耻」。一方、注(14)の『漢語外来詞詞典』はこの語を日本からの外来とし、語の典拠としては『東京夢華錄』秋社の次の用例を引く。「八月秋社……市学先生預斂諸生錢作社会」。「社会」という語に関しては、斎藤毅前掲書、第五章「社会」という語の成立」が詳しい。

(50) 『漢語外来詞詞典』はこれを日本からの外来語とし、語の典拠として『楞伽經』から次の一文を引く。「由自心執着、心似外境転、彼見非有、是故說唯心」。

(51) 『山下龍二教授退官記念中国学論集』研文社、平成二(一九九〇)年、所収の「宋明時代のいわゆるへ心学について」(一四五頁)。

(52) 原文をⅢから引いておく。「按、物一而已、以其流行而言、謂之氣、以其凝聚而言、謂之体、以其妙用而言、謂之心、以其變化而言、謂之光、謂之熱、謂之濕、謂之電、其他凡在覆載間者、無一不自物而生、此唯物論所以緣起也」。

(53) たとえば、『Common sense』、「常識、按、常識之字、出于語孟字義」(Ⅲ)、『Necessity』、「必然、按、童子問、天有必然之理、人有自取之道」(Ⅲ)、『Propriety』、「的当、按、古学先生文集四、譬喻的当、是足警醒学者」(Ⅲ)。

(54) この時期で印象深いのは、清野勉が、『Conservation of energy of force』を「勢の大涅槃」と訳したことである(清野前掲論文)。

(55) 「先神命之、国民信之」(『左伝』昭公一三年)。

(56) 「実無所得、其実不虛」(『伝心法要』など)。

(57) 断り書きはないものの、『Deduction』と同様であろう。「演繹法、按、中庸序、更互演繹、作為此書」(Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ)。

(58) 『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』商務印書館、一九五九年、および注(14)に挙げた『漢語外来詞詞典』は、典拠として以下を引く。「敢犯顔色、以達主義、不顧其身」(『史記』太史公自序)。

(59) 中江兆民は『理学鉤玄』において、カントの「カテゴリー」を「性<sup>カテゴリー</sup>」と訳している。

(60) 『Nature』と「自然」の両語とも、東西両思想の根幹にかかわる概念であり、しかもそこに意味の大きな亀裂があって、日本人がそのズレに気づかないという状況がある。

(61) 一九七七年、平凡社刊、一九九五年、ちくま学芸文庫収録。佐藤全弘前掲論文にも訳語「自然」の一項を設けている。また、柳父章『翻訳語成立事情』（岩波新書、一九八二年）「自然」の章も見よ。

(62) 注(3)所引、飛田良文『哲学字彙訳語総索引』を利用して、逆に「自然」の訳語が与えられている欧語をまとめて抜き出しておく（但しこの索引の対象は第I版のみ）。

Natural — 自然、Unconditioned — 自然、Natural theology — 自然神学、Agamogenesis — 自然産生（生）、Deism — 自然神教、Natural selection — 自然淘汰、Absolute truth — 自然之理、Archigony — 自然発生。

(63) 井上らの姿勢は「自然」の原義に徴する限り正しい。中国では「自然」は実体としての天地山河を表わす語ではなく（それに該当する語として別に「山水」「天地」などがある）、文字通り「自ら然る」という哲学概念であった。『老子』二五章の「人法地、地法天、天法道、道法自然」の「自然」は名詞ではあるが、手で触れ目で見うるものではない。陶淵明の「久在樊籠裏、復得返自然」（「帰田園」其一）の「自然」は「田園」の同義語のように思われやすいが、ここも「自ら然る」あり方を意味し、一海知義氏が「束縛のない、作為を必要とせぬ自由さ。この時代の自然ということばは、nature という意味よりも、natural の方に近い」と注している（岩波版中国詩人選集）のがおそらく正しい。唐の孟浩然の詩、「卜築依自然、檀溪不更穿」（「冬至後……」）の「自然」は微妙であるが、「自然の中に家を建て……」と訳すだけでは不十分なように思う。ここは、家の造りが非人工的なこと（たとえば粗木あらぎを使うとか）を言うのではあるまいか。こうした中国の「自然」が、何故日本近世において（日本から波及して中国・朝鮮においても）、「自然保護」などというような実体概念をその意味の一つに含むようになったのか。それは、nature を「自然」と訳した時に、ネイチャーの意味の一部が「自然」の中に織り込まれたためではあるまいか。

(64) 平成三（一九九一）年三月二九日のシンポジウム当日、ディスカッサントの市川裕見子氏は、筆者が発表したこの部分を「中国思想の空洞化」として、明解に言い換えて下さった。

(65) 清野勉前掲論文。

(66) 注(1)参照。

(67) 注(58)の『五四以来漢語書面語言的變遷和發展』、『漢語外来詞詞典』や、高名凱・劉正埙『現代漢語外来詞研究』文字改革出版社、一九五八年、潘允中『漢語詞源史概要』上海古籍出版社、一九八九年、等を見よ。

(68) 中国で最も普及しているスタンダードな国語辞典である『新華字典』に言う、「革命。(一)被圧迫階級が暴力を用いて政權を奪取し、古くて腐敗した社会制度を打ち毀して新しい進歩した社会制度を建立すること。(二)事物の根本的な変革」(一九八七年重排本)。

(69) 注(14)を見よ。

(70) 鈴木修次氏前掲書、八頁参照。

(71) 注(68)所引『新華字典』に言う、「文明。社会が発展してより高い段階に到達し、高い文化を備えるに至ること」。

(補註)森岡健二氏の調査によれば、次のような英語辞典から採った訳語がその大半を占めるといふ(「欧米における事物概念の翻訳」『翻訳』岩波書店、昭和五七(一九八二年)、所収)。

『英和对訳袖珍辞書』(慶応三年)。

『英和字彙』初版(明治六年)。

『英華字典』(メドハーストおよびロブシャイド)。

〔追記〕本稿は、一九九一年三月、京都で開かれた国際シンポジウム「誤解と創造性——一九世紀日本の翻訳の問題」(国際高等研究所主催)における発表原稿に加筆したものである。当日、有益な助言を寄せられた各位に感謝する。